

ICTを活用した幼稚園との交流

—教育実習指導における部分保育の試みから—

林 美 代・廣 瀬 三枝子

1. 研究の所在と目的

保育者を目指す学生にとって実習は貴重な体験の場であり、現場から得られるものは大きい。その実習に向けての指導は重要である。栗原の研究¹⁾や久保田の報告²⁾、三澤の研究³⁾などから、実習前に教育・保育現場の実態を知るための学びには意味があると言われている。そのため筆者は、担当する事前事後指導としての「教育実習Ⅰ」において子ども理解が出来るように附属幼稚園での観察等の体験を重視した授業を組み立ててきた⁴⁾。しかし新型コロナウイルス感染症 (covid-19) の流行に伴い、学校教育の在り方に大きな変革がもたらされてきており、保育者養成においても新たな対応が求められるようになってきた。実習指導においても、前年度より感染拡大防止の観点から幼稚園での観察等の実施が困難となり、他の方法での指導を模索せざるを得なくなった。

一方、「教育の情報化ビジョン」⁵⁾において、21世紀を生きる子どもたちに求められる力として情報活用能力の育成が挙げられ、教育現場へのICTの導入が進められてきた。中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上にあたって」⁶⁾では、新たな課題としてICTを用いた指導法が言われた。この答申を受けて教職課程を編成するにあたって「教職課程コアカリキュラム」⁷⁾が公表され、保育内容の指導法や教育実習などにおいても

情報機器活用が求められるようになった。

『幼稚園教育要領』⁸⁾においても、ICTを活用して幼稚園生活では得難い体験を補完することが言われるようになっており、現場でもICT活用が求められることとなった。教育現場でICT活用を行うにあたっては、その使い手である保育者側の活用知識が求められるため、保育者を目指す学生側の能力の向上も求められる。さらに、中央教育審議会答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」⁹⁾において、近年の新型コロナウイルス感染症 (covid-19) の予測不可能な事態を鑑みてICT活用を令和2年度末までに整備するよう計画を前倒しすることが求められ、ICT活用能力の育成は急務となっていった。そのため、実習指導においてICTを活用する取り組み¹⁰⁾や学外実習の代替となる学内実習でのICT活用プログラムの構築¹¹⁾、あるいは5歳児とのオンライン交流の取り組み¹²⁾などが行われるようになってきた。

これらのことから、本年度の「教育実習Ⅰ」における前期実習(6月)に向けた指導では、幼稚園見学をオンラインで行うこととし、その際に子どもたちに向けて話しかけたり絵本や紙芝居を読んだりしながら交流を図り実践力の育成を目指した。本研究では、本学附属幼稚園とオンラインで繋いで行った部分保育について報告するとともに、学生の記録などから実践内容を検討し今後の指導に役立てるための方法を検討することを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 研究の対象

「教育実習Ⅰ」を履修する本学子ども学科第Ⅰ部

令和3年12月6日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)8049 FAX 0877(49)5252
Email hayashi@kjc.ac.jp

2年生（Aクラス25名、Bクラス25名）及び子ども
学科第Ⅲ部3年生（35名）

（2）研究の方法

「教育実習Ⅰ」の授業内で本学附属幼稚園とオンラインで繋いで行った観察や部分保育などの実践について、学生の記述を中心に教育実習指導としての在り方について検討し、オンラインでの活動の影響（効果や問題点）を考察する。

（3）実践の内容

- ①前期実習前に年少、年中クラスとオンラインで繋ぎ、部分保育を通して子どもの様子を知る。
- ②前期実習後に年長クラスとオンラインで繋ぎ、部分保育を通して年長児の様子を知る。

3. 授業の展開と考察

（1）年少クラス

5月20日に第Ⅲ部3年生、（以下Ⅲ3）、21日に第Ⅰ部2年生Aクラス、（以下2A）及び第Ⅰ部2年生Bクラス（以下2B）が、本学附属幼稚園年少クラスとオンラインで繋ぎ、パネルシアター（Ⅲ3）、紙芝居（2A）、スケッチブックシアター（2B）を行った（写真1、写真2）。4～5名の学生がカメラの前で部分保育を行い、それ以外の学生はスクリーンを通して子どもの様子を観察したり、カメラの前で展開される部分保育を見学したりしながら記録を行った。

授業から学んだこと（感想・反省・疑問点など）では、以下のような記述が見られた。

学生A：実際に見たことで、参考になった部分がたくさんあった。自分がやる時（実習などで）は、やる事に必死になるので気づきにくかったりするけれど、他人のを見ることで、初めて気づいたり改善点がわかったりした。3歳児がどんな感じなのかも分かったので実習（3歳児）でのイメージがついた。

学生B：子どもの声（反応）を聴くことができなかったけど、しっかり集中してみてくれてる子もいて、子どもたちも楽しそうだった。



写真1 年少1組と繋いだ様子（幼稚園側）



写真2 年少2組と繋いだ様子（幼稚園側）

ゆっくりはっきり大きな声でしゃべるなどの話し方、ペープサートの動かしかた（話している方だけ動かす）など見学して色々気づくことができたので、自分も振り返っておこうと思った。

学生C：「勇敢」という言葉を使っていたので、子どもたちにもう少しわかりやすい表現にしたら良いかなと思いました。接続が不安定な中、（部分実習をした学生は）大きな声で子どもたちが分かりやすいようにしようとしていたと思いました。現場でする時もトラブルとかあった時に柔軟に対応していく力も大事だと思いました。

学生D：反応はしてくれたが、じっと座ってい

れない子が多い気がした。初めてズーム越しでスケッチブックシアターをして緊張めっちゃしたけど、とてもいい経験になりました。「子どもたちに伝える」ことを意識して実習に臨みたいと思いました。

学生E：人が映っていない方が集中が切れるのが早いのかなと思ったので人を映すほうがいいのかと思いました。

学生F：保育者や大人の思う通りに全てが進むことはないの、子どもたちが上手に話を聞いたり参加できるような声かけが大切だと感じた。実際に子どもたちと関わることが少ないので、どのような形でも、関わりを持てることは良い機会だと思った。

学生G：時差があったり聞こえているのか分からないので難しそうだなと、見学して感じた。改めてzoomよりも対面がいいと感じた。

学生H：リモートなので、（部分保育をしている学生は）なかなか近くで子どもの観察ができにくそうだった。子どもの声も聞きとりにくそうだった。

（原文ママ／下線、カッコ内補足は筆者）

学生Aや学生Bのように、第三者的な視点から考えることができる学生もいた。学生がしていることを失敗も含めて見ながら、自分のこととしてとらえようとしていた。幼稚園側からの映像と実際に目の前で展開される学生のカメラ越しの映像がスクリーンに映し出されるため、イメージはしやすかったのだと思う。

また学生Cのように、自分では意識せずに使っている言葉も子どもたちにはわかりにくいということを画面越しながら感じている学生もあり、言葉遣いに気を付けたいという課題を見出した学生もいた。

しかし学生がどのようなところに注目して子どもたちの様子を見ていたのかを考察すると、学生Dのように行動に着目する学生が多かった。特に学生Dのように「椅子にじっと座って話を聞いているか」という点から捉えようとする学生が多く、「出来ないことを何とかしてあげないといけない」という意識が強いと感じられた。

学生Eは映像を見ながら、画面に人の顔が映るほうがいいのではないかと感じている。「顔を映してほしい」という意見は幼稚園の方からも出てきた。子どもたちは人の顔を見ることで安心するようで、人の顔が映っていないと不安になるようだ。いつも当たり前のように絵本や紙芝居を子どもたちは楽しんでいるのだが、子どもたちは絵本や紙芝居のみを楽しんでいるのではなく、いつも一緒にいてくれる保育者の何気ない姿も一緒に楽しんでいるのではないか。保育という行為は、人と関わる仕事であるということを改めて感じさせられた。

初めてオンラインで繋ぎ、幼稚園の子どもたちに対して部分保育を行ったため、学生Gや学生Hのように不自由さを感じる学生も多かった。それは学生の自然な感想であろう。それでも学生Fのように関わりを持てたことを喜ぶ学生も多く、「子どもの様子を知る」という点では意味があったのかもしれない。しかし機材トラブルも多く、それについて授業者側と幼稚園側双方が対応する姿を学生が見る機会も多かった。そのため学生Cのような感想も生まれたのではないか。学生はこれまで受け身であることが多かったが、目の前で保育者や教員が対応する姿から、現場に出れば自分たちが主になって動くということを意識し始めたように思われた。

（2）年中クラス

5月27日にⅢ3、28日に2A及び2Bが、本学附属幼稚園年中クラスとオンラインで繋ぎ、大型絵本



写真3 年中1組と繋いだ様子（幼稚園側）



写真4 年中1組と繋いだ様子（短大側）



写真5 年中2組と繋いだ様子（幼稚園側）



写真6 年中2組と繋いだ様子（短大側）

（Ⅲ3）、ジャンケン遊びを取り入れたダンス（2A）、絵本と手袋シアター（2B）を行った（写真

3、写真4、写真5、写真6）。4～5名の学生がカメラの前で部分保育を行い、それ以外の学生はスクリーンを通して子どもの様子を観察したり、カメラの前で展開される部分保育を見学したりしながら記録を行った。

授業から学んだこと（感想・反省・疑問点など）では、以下のような記述が見られた。

学生C：年少さんとは反応が違い、反応が返ってくるのでやり取りがしやすいと思いました。反応してくれるので、その反応にもしっかりと答えながらコミュニケーションをとることが大切だと思いました。

学生B：先生との言葉のやり取りを楽しむ姿が見られたので、たくさん話を投げかけたりすると良いと思った。あまり長い本を読むと集中力が切れる。自分は4歳児の実習に入るので、どんな子どもたちがいるのか、どんな反応が見られるのかなど、とても勉強になった。

学生I：大学内で実際に（模擬保育を）するのと子どもを前にしてするのは、全然違うことが分かった。

学生J：途中、子どもたちがカメラ付近に立ち寄ってきた時や、（本来一列で踊るはずだが）二列になってラッキーマンボーを踊っている時、保育者は「後ろ下がってね」「一列になってね」と声かけをせず、子どもたちが楽しんでいる姿を大切にしていた。

学生K：今回、リモートを見て、人形をつかっているととても興味がわいてうれしそうにしている姿が見られた。人形を使うことと、文字が少なく絵が分かりやすい絵本を使ったことで、子どもと交流しやすいと思った。

学生L：子どもたちの実際の様子を見て、どういったときによく反応していて、反応がうすいのがよく分かりました。文字や言葉よりも視覚的なものを用いる方が有効的な方法なのだと感じました。手袋シアターという仕方も興味をひけてとても良いと思いました。

学生D：話を聞く時はちゃんと手はおひぎで聞けていた。質問に対して子どもたちのきちんと反応していた。

学生A：タイムロスが合って反応が遅れるのは理解していたけれど、いざやってみて反応が遅れて（すぐに反応が）無かった時はとても不安になって動揺してしまった。

学生H：リモートなので子どもの細かい様子がわかりにくかった。現場での反応を見てみたかったので、実習で（同じ内容を）やってみたいと思いました。

（原文ママ／下線、カッコ内補足は筆者）

学生Cのように、年少児と比較しながら見ようとする学生が多く見られた。中には学生Bのように子どもの姿から保育者としてどうしようかと考えている学生も見られるようになった。学生たちは模擬保育をいろいろと経験しているが、子どもたちと実際に関わる経験は社会状況的にも少なかった。そのため、模擬保育におけるイメージとの違いを実感している学生も一定数おり、学生Iは自分たちの幼児理解とのズレを痛感する形になったのであろう。幼児理解があつたうえでの模擬保育ということを考えさせられた。

見学している学生は子どもの様子だけを見ているわけではなかった。学生Jのように幼稚園側の保育者の対応を見ている学生もあり、保育者が何を大切にしようとしているのかを考えようとした学生も見られた。また、学生Kや学生Lのように目の前で展開される保育教材について、子どもの反応と比べながら意味について考えようとした学生もいた。前期実習が近づいてきたこともあり、実習に向けてどのような視点で何を見ればいいのかを考える時間ともなっており、実習への意識も高まっているように感じられた。

しかし学生Dのように年少児と比較して子どもたちを見ているけれども、座り方や自分の話を聞いてくれるかどうかに着目しただけの学生もあり、子どもを見る視点についての理解が難しいと感じる学生も多いように感じた。座って保育者の話を聴けるかどうかということ、根底に保育者主導の意識があるのかもしれない。保育者主導の意識が高い学生は、どうしても子どもが出来ていること、出来ないことをまず記述しようとするのではないかと思わ

れた。

オンラインの難しさに対する記述も一定数は存在する。学生Aと学生Hは実際に部分保育を行った学生である。年中クラスに対しての部分保育の感想からは、見学した学生よりも実際に行った学生の方からやりにくさの訴えが多く出ていた。見学者としての立場の学生は子どもの様子や保育者の様子を客観的に見ることができるけれども、部分保育を行っていた学生は子どもの言葉や表情をうけて自分の言葉を選ぶため、難しさを痛感したのであろう。実習に向けて子どもの姿を受けて保育を展開したり言葉を掛けたりしようとする意識も感じられた。

（3）年長クラス

7月1日にⅢ3、2日に2A及び2Bが、本学附



写真7 年長1組と繋いだ様子（短大側）



写真8 年長2組と繋いだ様子（短大側）



写真9 年長1組と繋いだ様子（短大側）

属幼稚園年長クラスとオンラインで繋ぎ、ペーパースートと紙芝居（Ⅲ3）、ジャンケン遊び（2A）、ピアノ伴奏を含むパネルシアター（2B）を行った（写真7、写真8、写真9）。4～5名の学生がカメラの前で部分保育を行い、それ以外の学生はスクリーンを通して子どもの様子を観察したり、カメラの前で展開される部分保育を見学したりしながら記録を行った。

授業から学んだこと（感想・反省・疑問点など）では、以下のような記述が見られた。

学生B：年少さん、年中さんに比べても反応が良く、少し驚きました。反応が良いからこそ、先生もどう言葉掛けをするのが良いのかを考えながら保育していく必要があると思った。

学生J：（4歳児、5歳児ともにジャンケン遊びだったが）同じ遊びでも、年齢によってアレンジをしたり物語を取り入れてみたり、「ジャンケンをする」をメインにするかダンスをメインにするかなど、どの部分を中心にするのかによって、保育者側の援助が変わってくると感じた。ねらいと繋がる援助を考える必要がある。

ネット環境が悪い等のトラブルが発生したとき、どのように場をつなぐのか、無言にならないようにすることが難しい。

学生F：実習では関われない年齢だったので、少しの時間だけでも、子どもたちを目でみて関

われたので良い時間になったと思った。

学生A：手作りシアターに子どもが夢中になっていたので後期の実習で参考にしたいと思った。子どもの反応に対して「笑顔でうなずく」と受け止めてもらえたと思って子どもも安心できると思ったので、自分が子どもと関わる時は意識して笑顔でうなずき受け止める姿勢をまず見せようと思った。

学生D：静かに自分の席で座っていた。実習でも5歳児クラスの子どもたちを見ましたが、5歳児クラスになると席にも静かに座り話を聞いていたのでさすがだなと思いました。

学生H：リモートなので子どもの様子がわかりづらかったです。実際に活動する時には、子どもと関わりながらすると、子どもの様子がより分かり、しやすかったかなと思います。

学生M：コロナの影響で仕方ないと思うが、実際の現場で子どもの前に立っての部分実習が見たいと感じた。音割れしすぎて子どもが何を言っているのか分からないのがすごく残念であった。

学生N：電波が悪かったので、上手く伝わっていなかった。リモートでジャンケンは難しい。

（原文ママ／下線、カッコ内補足は筆者）

年長クラスでの部分保育は、前期教育実習終了後に行った。そのため、学生Aや学生Fのように実習と関連されながら様子を見ている学生も多くいた。学生Bのような感想は、実習で子どもたちの反応が良いからこそ何か感じたり苦労したりした経験があつての感想かもしれない。また、学生Jのように同じ遊びを年中と年長で見た場合、子どもの年齢に応じて柔軟にねらいを変える必要があるということを感じ取った学生もいる。たまたまではあったが、同じような内容（ジャンケン）を年齢の違った子どもたちの前で展開している様子を比較するということからの学びも大きかったのではないか。子どもの姿に沿ったねらいというものを感じられるという経験は今後につながるだろう。

実習園の都合もあるので、1つの学年しか見ることができない学生も多い。学生Fもそのような学生

である。対面では1つのクラスしか見ることはできないけれども、オンラインで繋げばいろいろなクラスの様子を見ることができる。その利点を感じたのではない。今後のためにもいろいろなクラスを見たいという学びの姿勢を感じられた。

しかし、学生Dのように実習を経験した後でも、「座って話を聞けるかどうか」が第一の視点であった学生もあり、今後も引き続いての指導が必要であろうと感じた。DVDを使って子どもの様子を見る場合は指導する教員側から随時見る視点を提供できるが、オンラインでは教員が機材対応に追われるためその視点の提供がほとんど行えなかった。見る視点の提供ということについては実習指導上課題があると感じた。

今回、インターネット接続の状況があまりよくなかった。そのため、クラスによってはかなりの中断を経験したところもあった。コロナ禍なので仕方ないということは学生も理解しているが、それでも実習を経験し子どもたちと対面で接した感覚と違うことを改めて実感し、学生Hや学生M、学生Nのようにオンラインでの部分保育の難しさを指摘する感想が多く見られた。そのような状況下であっても、学生Jのように授業者側と幼稚園側双方が対応する姿を見ることで、トラブル発生時の対応を学ぼうとする意欲が見られた学生もあり、その点は成果と言えるのかもしれない。

(4) 教材等について

今回、幼稚園とオンラインで繋ぎ子どもたちの前で部分保育を行ったところ、教材等について考えさせられることもあった。

オンラインでの絵本の読み聞かせについては、学生の感想にもあったように読み手の顔が映らないことは子どもたちを不安な気持ちにさせる場合があることが分かった。年少、年中で絵本の読み聞かせが行われたが、年中児に対して大型絵本の読み聞かせを行った時に顕著に表れたようだ。画面いっぱい絵本のみが映し出されページをめくる手のみが時々映るくらいだった(写真10)ので、絵本の中のキャラクターと読み手の声あまり重ならず話に入っていくづらかったのではない。読み手の表情も含めて子どもたちは理解しているようだったので、オン



写真10 大型絵本を大きく映す

ラインで絵本の読み聞かせをする時は、画面に顔を映しにくくなるので大型絵本は特に不向きであると感じた。

ジャンケンについては、学生も感じていたように時差が発生するためにやりづらさがあった。目の前で何が出たのか、勝ったのか負けたのか、その瞬間、瞬間で楽しむ遊びのため常に時差を考えながら確認する必要があった。そこが学生側にも幼稚園側にもやりづらさを感じた原因ではないだろうか。「一瞬を楽しむ」観点からは不向きであるが、「後出しでも学生に勝つことを楽しむ」というねらいであれば成立すると思うので、ねらいの作り方の工夫が必要であると感じた。

県内で新型コロナウイルス感染者が増えた時期には、幼稚園側から感染症対策等の指導に関する部分保育をオンラインで行ってほしいという依頼もあった。時期的な問題もあり、それに対応したクラス(2B)の部分保育には子どもたちも関心をもったようである。特にキャラクター(手袋人形)を使って「もんちゃん」と一緒に考えるというストーリーだったので、子どもたちも受け入れやすかったのかもしれない。学生の感想にもあったが、視覚的に訴える内容だったので分かりやすいという効果もあった。学生も時々キャラクターをアップで映し、見せたいところをしっかりと見せることを心がけていたので、対面では見られない視覚効果だと思われる(写真11, 写真12)。全員が同じように重要なところが大きく見えるというところは、ICT活用ならではの点であり、大型スクリーンを使うよさである。



写真11 手袋人形を大きく映す



写真12 感染症対策の指導

4. まとめ

以上のように本学附属幼稚園とオンラインで繋いで授業を展開することにより、学生は多くの学びを得たようだ。短大では、授業者側と幼稚園側双方の映像をスクリーンに並べて映したことで、見学者となった学生は客観的に双方を見ることができた。学生の様子と子どもの様子を同時に見学することにより、学生がしていることと子どもの様子を比べながら保育について考えることができたように思う。学生は失敗やトラブルも含めて全て見ることで自分のこととしてとらえようとしていたり、幼稚園側の保育者の対応と学生の対応を比べながら保育者が何を大切にしようとしているのかを考えようとしていたりしていた。ある意味2人が同じ子どもの前に立って保育をしている感じになり、それぞれの保育の違いを

リアルタイムに見て比べることができるので、それは対面にはない効果ではないか。

また、対面での見学では、保育する側もしくは子ども側のどちらか一方の表情を正面から見ることは出来るが、それを同時に見ることは不可能である。しかしスクリーンに並べて映すことにより、保育者がどのような働きかけをするとどのような表情で子どもたちが応えてくれるのかを同時に見ることになり、自分たちにも訴えかけてくるような感覚で観察し自分のこととして考えられたのではないだろうか。その点においては、効果的な実習指導であったと思われる。

幼稚園とオンラインで繋ぐことは学生の学びとなるだけでなく、15分程度ならば子ども側も地域のお兄ちゃんやお姉ちゃんと交流できたという楽しい経験となる。生活と密着した内容であるならば特に子どもたちの学びにも繋がる。実際、手洗いの場面で「お姉ちゃん先生が言っていたよね」「もんちゃんと学んだね」などと言葉をかけると子どもたちは楽しそうに手洗いを行っていた。保護者でもなく園の保育者でもない学生から学んだ経験は子どもたちの心に残っており、楽しかった経験を思い出すような言葉かけがあればそれが生活の中に活かされてくる。

また、授業者側は「給食前なので食べ物に関わることを計画してはどうか」という思いからの計画であったが、その活動が幼稚園行事の中でのカレー作りへと繋がった内容もあった。たまたまではあったが画面越しに鍋の中に具材を入れてカレーを作る様子を見たことで、自分たちが実際にカレーライスを作る時のイメージが作り上げられていった。もし事前にもっと詳しい打ち合わせがあればさらに効果的だっただろう。オンラインならば保育者同士、教員同士が繋がっていれば教材として成立する。地域連携も含めて外部と繋がる時には、詳しい打ち合わせがあれば双方にとっても良い学びの機会となるであろう。ICTを活用して繋がることは、どこにいても温かいコミュニケーションが取れるという点で効果があると感じられた。

そのように言いながらも対面の効果は否めない。それでも時期的な問題や社会的背景を考えると、ICTを活用した学びの検証には意味があり、こういった形での学びは今後重要になってくるであろう。

註

- 1) 栗原ひとみ (2014)「幼稚園教育実習 I における観察実習の意義—実習前後アンケートから探る—」『植草学園大学研究紀要』 6, pp.69-78
- 2) 久保田貴子 (2016)「エピソード記録を通して学ぶ～保育科一年生の「観察実習」と「教育実習指導」の授業の中で～」別府大学短期大学部『初等教育—研究と実践—』 42, pp.22-33
- 3) 三澤恵 (2016)「幼稚園での観察学習と日誌指導の授業実践と効果—学生の主体的な学習を重視した教育実習指導の検討—」梅光学院大学『子ども未来学研究』 11, pp.31-41
- 4) 林美代・廣瀬三枝子 (2020)「教育実習指導における附属幼稚園との連携」『香川短期大学紀要』 48, pp.155-164
- 5) 文部科学省 (2011)「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/06/26/1305484_01_1.pdf (2021/11/26)
- 6) 中央教育審議会 (2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)」(中教審第184号)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm (2021/11/26)
- 7) 文部科学省 (2017)「教職課程コアカリキュラム」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkokoku/1398442.htm (2021/11/26)
- 8) 文部科学省 (2018)『幼稚園教育要領』
- 9) 中央教育審議会 (2021)「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」(中教審第228号, 令和3年4月22日更新)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm (2021/11/26)
- 10) 板倉史郎 (2020)「実習指導におけるICT活用の取組と可能性 —コロナ禍の対応を出発点に—」『大阪千代田短期大学紀要』 50, pp.74-85
- 11) 川俣沙織・山下雅佳実・櫻井裕介・水渕美香子・井上智史 (2021)「学外実習の代替となる学内実習の概要と展開 —ICTを活用した保育現場との協働による学内実習プログラムの構築—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』 53, pp.157-165
- 12) 川口めぐみ・徳岡大 (2021)「保育・教育系学生による5歳児とのオンライン交流活動の試み」高松大学・高松短期大学『研究紀要』 76
<https://www.takamatsu-u.ac.jp/study/library/publication/kiyo-journal/#article-76> (2021/11/30)

